統計から読みとる助産婦の周辺

福島 靖正
厚生省大臣官房統計情報部衛生統計課

このところ1.57だ，1.53だと大騒ぎですが，合計特殊出生率という仮想的な指標の持つ意味が十分に理解されないまま，数字だけが一人歩きをしているようで，合計特殊出生率もさぞ迷惑しているだろうと思います。確かに，統計をきちんと理解することは，なかなか大変なことです。まして小さな活字の数字がズラーッと並んでいる統計表をみるのが好きな人はあまりいないと思います。

でも，統計というのは不思議なもので，つらつら数字を眺めていると，けっこうおもしろいことに気がつきます。たとえば，出生数と助産婦数を見ると，1955年の出生数は173万であったのが，1990年には122万と減少していて，これにともなって就業助産婦数も55,356人から22,918人へと非常に減ってきています。やっぱり少産の時代は助産婦にとって，大変かな，と思いがちです。

ところが，就業助産婦1人当たりの年間出生数を計算すると，1955年31.3であったのが1990年は53.3と1.7倍になっています。産婦人科医を加えてみても，就業助産婦・産婦人科医1人当たり出生数は，25.4から34.1と1.34倍になっています。もちろん人口動態統計を見ると，立会者が助産婦の出生は激減していますが，これは医師と助産婦とが立ち会った場合には医師が立会者となること，病院・診療所での分娩がほとんどであることから，助産婦が取り上げた場合も医師が立会者となってしまうからと考えられます。

こうしてみると，少産の時代といわれる現在でも，就業助産婦は1955年頃と同様に，というよりむしろ，より多くの分娩を扱い以前より忙しくなっているに違いないと思います。

このようにいくつかの統計を組み合わせてみることで，単独の統計ではわからないものが明らかになって，やっぱり統計はおもしろいと思うのですが，皆さんはいかがでしょうか。

もう1つ，他の統計をご紹介しましょう。最近，若い助産婦さんが開業したという話をよく耳にしますが，現実にはどうでしょう。開業助産婦は1982年の7,943から1990年の3,961と，この8年で半減しました。これは60歳以上が減少したためですが，54歳以下に限ってみると1988年の204人を底として1990年には257人と再び上昇に転じています。就業助産婦全体のわずか1%ですが，この流れは少しずつ大きく，確実なものになりつつあるようです。でも，今後どうなるかは皆さん次第でしょう。

地域には多くのニーズがあります。情報過多の中で，気軽に相談する場所を知らないお母さんたちの育児不安は大きく，働きすぎの夫は頼りにならず，援助してくれる姑や母親は側にいないし，いても若いお母さんと知識のずれがあって摩擦は起きるし，ストレスはたまる一方です。高齢社会の中での母子保健の重要さが強調されるようになってきましたが，開業助産婦がグッと減ってきている今だからこそ，病院や診療所を出て地域社会の中に入っていく良いチャンスなのかもしれません。

© IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/09/17 09:51:54